



チュラロンコン大学の 講義の思い出

前 田 幸 雄*

昭和56年12月6日～18日迄、日本学術振興会から派遣されて、タイ国バンコク市のチュラロンコン大学の大学院土木工学専攻の学生に構造信頼性理論と設計への応用に関する講義を行った。年に2～3回外国出張する最近の私にとってもこの講義は極めて思い出に残るものであった。又昭和57年には12月15日～17日、バンコクで開催の第2回アジア構造工学会議に招待され、その機会に同大学の土木工学科教官と旧交を暖めることができた。

チュラロンコン大学は大正6年創立のタイ国最古・最大の名門総合大学で、教官・学生・卒業生共にこの大学を非常な誇りとしている。14学部、16,000名の学生、4つの研究所をもち、工学部は11の学科から成り、内8学科に大学院を有している。キャンパス内には15世紀アユタヤ王朝の建築様式を伝える豪壮華麗な宮殿スタイルの校舎が青空に輝いて誠に趣きがある。土木工学科は学生数1学年100名、教授2、副教授22、助教授7、講師4名である。私の講義の受講者は大学院生15、教官5、外部からの技術者10名、計30名であった。写真2は土木工学科の構造実験室の前で写した筆者と受講生の一部である。

講義は大阪大学の大学院におけるものと殆んど同じ内容と範囲で実施した。信頼性理論という新しい学問のために、学生も教官も大きな興味を示したが、学生の確率論や統計学の知識のないことが当初障害になった。しかし質疑応答を活発にし、実際問題への応用のデモンストレーションに努力した結果、終り頃には学生の方が積極的に新しい研究への意欲を示すなど、成功であった。100頁の英文テキストと約230枚の



写真1 文学部の校舎



写真2 受講生に囲まれて

OHP フィルムの用意も大いに役立った。英語による講義と質疑応答には全く障害がなかった。中休み15分をおいても3時間の講義はかなりきつく、教官とタイ食の昼食をとった後しばらく休息したのであるが、午後は又若手の教官と学生が控室を訪ねてきて、研究へのアドバイスや指導を行った。

土木工学科教官の中で15名、それも若手の教官が米国で取得した学位を有している。しかし米国から帰国して研究を継続しようとしても、研究費はない、実験設備は古い、それにもまして安い給料のために外部のコンサルティングの

*前田幸雄 (Yukio MAEDA), 大阪大学, 工学部, 土木工学科, 教授, 工博, 構造工学

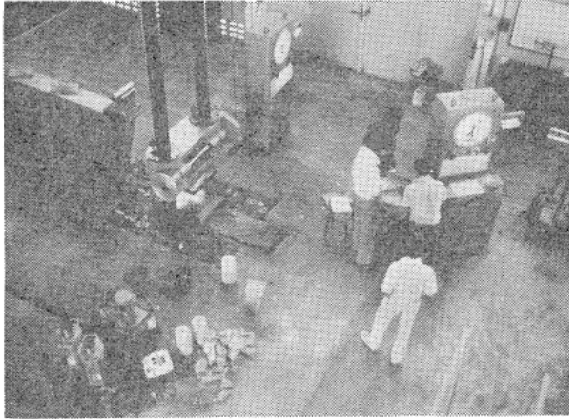


写真3 旧式の万能試験機

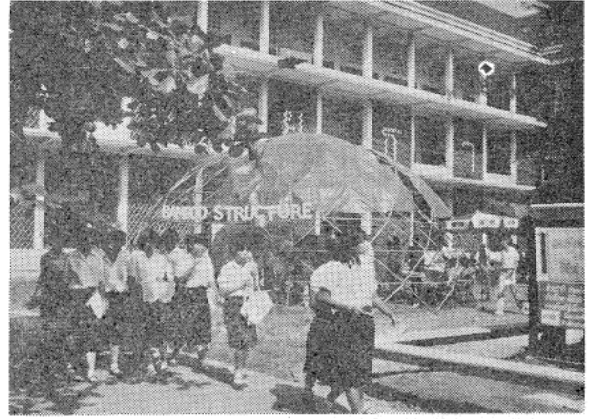


写真5 学園祭の竹製空間構造

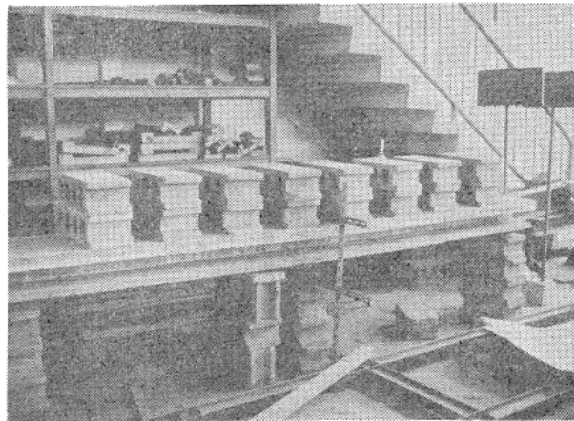


写真4 竹筋コンクリート梁のクリープ試験

仕事を内職としてやらざるを得ず、従来の教育中心から脱して、博士課程充実の必要性から研究指向の活動にめざめているものの、意欲未だしの印象をうけた。実験設備などは新しいものでも10年前のもの、それも米国からの寄贈による万能試験機1台(写真3)が目立つのみで、他は日本では殆んど見られない古い物ばかりである。日本からの経済的援助を期待する声をどの教官からも訴えられた。

今回の私の講義に対してもそうであったが、日本側に非常に高いレベルの学問の講義を要請してくるが、我々の講義は研究に裏づけされ、且つ日本の発達した技術を背景としている。単にレベルの高い学問ではなく、タイ国の技術の発達に役立つような研究から成長して行く学問をめざすべきと考え、教官連中とつっこんだ意見の交換を行った。写真4は鉄筋コンクリートではなく竹筋コンクリートの梁のクリープ試験であり、又写真5は丁度開催された学園祭のために製作した竹製空間構造である。学問の伝達

に当たっても、共同研究実施に於ても十分考えなければならない最も重要な点である^{注)}。同じバンコクに各国政府の援助によって設立・運営されている自治組織の大学院大学 AIT (アジア工科大学) が近代的な設備をもち、研究に重点をおいて高いレベルの教育を行っている現状をみるにつけて、チュラロンコン大学の教官、特に次の世代を担う若手教官の奮起が望まれる。幸にして、我々大阪大学とチュラロンコン大学の間に姉妹校制度が結ばれたことは誠に喜ばしいことで、大学院教育の充実や共同研究実施を通じて学术交流が活発になることを期待したい。

筆者は正規の講義の他に、学内と外部からの聴講者約60名に対して世界における構造工学の動向につき3時間の特別講演も行った。このような次第で講義と講演の準備に追われ、観光の時間がなかなかとれず、学園祭で休講になった一日、バンコク市内を流れるチャオプラヤ川を船で遊覧し、日本の建設会社が完成した橋や現在施工中の橋を見学した。講義の最終回の半分は試験を実施し、閉講式には学生の一人一人に単位認定証を授与したが、最後に拍手のうちに一同の寄せ書きと記念品を受けとった時は、教え甲斐があったことと感激ひとしおであった。今なおタイ語のサワディーという挨拶の言葉を思い出す度に、寛容で礼儀正しく、又もてなしの良いチュラロンコン大学教官の姿を思い浮べる次第である。

注) 前田幸雄：発展途上国に対する学术交流について、日本学術会議発展途上国学術協力問題特別委員会講演資料、昭和57年2月。